

# 2021年度 大学院奨励研究員研究報告書

2022年3月16日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏 名	小南 悠	印
-----	------	---

指導教員

所属・職名	文学研究科・教授	
氏 名	橋本 安央	印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	〈亀裂〉の詩学 ——ハーマン・メルヴィル文学における非整合性の生産的読み替え
採用期間	2021年4月1日 ～ 2022年3月31日

研究科委員長・研究科長印	事務局印

提出先： 所属研究科事務

※所属研究科→研究推進社会連携機構（大学院）

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

(1) 学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名	小南 悠	論文題目	地図の西，西の地図 ——『タイプー』における地図表象		
	雑誌名	『関西アメリカ文学』		巻号	発行年月	掲載頁
				第58号	2021年10月	5-20頁

雑誌論文	著者名	小南 悠	論文題目	決別の聖餐 ——『ピエール』とワイン表象		
	雑誌名	Sky-Hawk: The Journal of the Melville Society of Japan		巻号	発行年月	掲載頁
				第9号	2021年12月	18-36頁

雑誌論文	著者名	Yu Kominami	論文題目	The Rhetoric of Solecisms: A Syntactical Analysis of Melville's "The Piazza"		
	雑誌名	Style		巻号	発行年月	掲載頁
				未定	2022年上半期	未定

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

(2) 学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	日本メルヴィル学会第8回年次大会	開催地	オンライン
題目	虚構の連鎖 ——『ピリー・バッド』，あるいは外側の物語	発表年月日	2021年9月12日

学会名	日本ナサニエル・ホーソーン協会関西支部3月例会	開催地	オンライン
題目	フィクションと感染 ——メルヴィルの『詐欺師』を読む（仮題）	発表年月日	2022年3月27日（予定）

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

## 研究経過状況（3000字程度）

### 【 本研究（博士論文）の概要 】

本研究期間中は博士論文の執筆に集中的に取り組み、本研究の成果をまとめた博士学位申請論文“The Rhetoric of Textual Flaws: A Study of Herman Melville’s Writings”を2021年11月に提出した。この博士論文は、2022年1月に行われた博士論文公開発表会および口頭試問を経て、承認された。

本研究（博士論文）の概要は以下の通りである。

本研究は、19世紀のアメリカ人作家Herman Melville（1819-91）の文学作品を、描写の矛盾、誤謬、齟齬、不正確さ、あるいは文法上の破格表現といった観点から読み解く試みである。これまで作家の過誤に帰せられてきたこうした〈テキストの欠陥〉を、Melville独自の修辞技法として再考することが、本研究の目的である。

しばしば指摘されるように、Melvilleは、作品の整合性や一貫性にそれほど重きを置かない作家であると考えられてきた。さらにまた、その文体も、作品そのものの非整合性に呼応するかのよう、統語的に破綻した構文や倒置などが多用される、一種独特なものである。Melvilleの作品には〈テキストの欠陥〉が散見されるのだ。

しかしながら、こうした〈テキストの欠陥〉は、一気呵成に書き上げた長編作品のみならず、作家の制御が比較的及びやすい短編作品においても見出される。加えてMelvilleは、自らの作品の中で繰り返し、文学作品における逸脱性という主題に言及している。そのようなことを思い合わせるなら、Melville作品に見られる無秩序的要素は、単なる過誤ではなく、作家が仕掛けたある種の修辞技法として再考すべきなのではないか。その可能性を、本研究は作品論を通して検討してゆく。

まず第1章では、Melvilleのデビュー作*Typee: A Peep at Polynesian Life*（1846）を取り上げ、この作品の冒頭を飾る地図に、ある誤謬が含まれていることを指摘する。そのうえで、この地図の誤謬が、作品に滲む帝国主義的言説をあぶり出す装置として稼働していることを跡づける。

第2章は、代表作*Moby-Dick; or, The Whale*（1851）における帽子描写の矛盾に着目するものである。従来Melvilleの見落としとしてされてきたこの矛盾が、作品を貫く落下の運動性を読者に想起させるための戦略的なものであることを論証する。

続く第3章は、*Pierre; or, The Ambiguities*（1852）の中で言及される1つの墓碑銘が歴史的事実と矛盾していることを踏まえつつ、主人公の破滅を巡る物語の変転が、この墓碑銘の矛盾を通してほのめかされていることを明らかにするものである。

第4章では、“*The Encantadas, or Enchanted Isles*”（1854）の第8スケッチにおけるエピソードと物語内容の齟齬に注目する。作品全体に通底する音の主題を補助線としたとき、この齟齬が、作中人物の悲嘆をアイロニカルに照らし出すために仕組まれた意図的なものであることを説明づける。

第5章では、“*The Piazza*”（1856）における文法的破格表現に焦点を当てる。行為の主体性を主題化したこの作品において、1人称代名詞に関わる破格表現が反復されていることから、こうした破格が語り手の主体意識の様相をあぶり出す修辞戦略であることを立証する。

最終章となる第6章では、歴史記述の不正確さを糸口に、Melvilleの遺作*Billy Budd, Sailor*（1924）を読み解いてゆく。物語は18世紀末という歴史空間を舞台に繰り広げられるが、その物語背景を構築する語り手の不正確な歴史記述が、語り手自身の語りの虚構性を浮かび上がらせるための作家の意図的な戦略であることを証明する。

以上の6つの作品論を通して、本研究（博士論文）は、Melville文学に見られる様々な〈テキストの欠陥〉をこの作家一流の修辞技法として捉え直した。そうすることで、Melvilleがきわめて前衛的な創作意識と言語感覚を有していたことを論証し、Melvilleの新たな作家像を構築するとともに、文学史におけるMelvilleとその文学作品の評価を上方修正する道を示した。

### 【 経過報告①博士論文提出時点 】

上記の通り、博士論文提出時点で、Melvilleの作家経歴最初期から後期にかけて執筆された6つの代表作品を精読・分析した。とりわけ、本研究期間（2021年度）は、6つの論考のうち、前年度までにすでに学会誌に発表してきた2つの論考を除いた4つの論考を、学会誌や口頭発表を通して発表した。

- (1) *Typee*論は、学術論文としてまとめ、2021年4月に日本アメリカ文学会関西支部が刊行する学術誌『関西アメリカ文学』第58号に投稿し、査読を経て掲載に至った。また、この論文は、同学会が設けている日本アメリカ文学会関西支部第8回奨励賞を受賞した。

- (2) *Pierre*論は、学術論文としてまとめ、2021年8月に日本メルヴィル学会が刊行する学術誌*Sky-Hawk*第8号に投稿し、査読を経て掲載に至った。
- (3) “*The Piazza*”論は、英語論文としてまとめ、2021年4月にペンシルヴェニア州立大学出版刊行の学術誌*Style*に投稿し、査読を経て採択に至り、現在校正中である。この論は2022年夏までに出版される予定である。
- (4) *Billy Budd*論は、口頭発表原稿にまとめ、2021年9月に日本メルヴィル学会第8回年次大会にて口頭発表した。この論考については、加筆・修正ののち、2022年4月に、国内主要学会が刊行する学術誌に学術論文として投稿する予定である。

以上の4つの論考は、学会誌掲載論文として採択後、あるいは口頭発表後に、加筆・修正し、博士論文の一部として組み込んだ。結果的に、6章構成からなる博士論文の本論のうち、5つの論考が国内外の査読付き学術誌に採択されたことは、本研究の学術的意義が客観的に認められた証左であると言えるだろう。

#### 【 経過報告②博士論文提出以降 】

博士論文提出後は、本研究の成果をさらに包括的かつ精緻なものにするため、さらなるMelville作品の読解・分析に取り組んでいる。

まずは2022年1月から3月にかけて、Melville生前最後に出版された長編小説*The Confidence-Man: His Masquerade* (1857)を精読・分析し、その分析結果を口頭発表原稿にまとめ、2022年3月に日本ナサニエル・ホーソーン協会関西支部3月例会にて口頭発表することが決まっている。

その後も、本研究の成果を修正し、発展させるために、未だ着手していないMelvilleの諸作品の精読・分析に順次取り組んでいきたい。